

私学の魂

暁星中学校・高等学校

キリストの愛による教育理念を130年間貫き、自由で温かな校風と文化を受け継いできた、生徒の可能性を信じて見守り、自主性を促す日本最古のカトリック系男子校

千代田区富士見の高台に位置するキャンパスは、皇居や靖国神社にほぼ隣接するともいえる東京の中心地。東京メトロ・都営地下鉄線「九段下駅」から徒歩わずか5分、JR中央線「飯田橋駅」からも徒歩10分ほどで通学できる交通至便な立地という魅力もあいまって、いまも東京の山の手エリアの男子進学校として、根強いファンを惹きつけています。そして来春2020年入試では、これまで30年以上にわたって続けられてきた従来の2月3日入試から、入試日を2月2日に移動。合わせて2月3日午後には2科目による2回目入試と、12月2日実施の帰国生別枠入試を新設し、人気動向が大いに注目されている暁星中学校。そうした大きな改革に踏み出した暁星中学校・高等学校の企画広報部長の高橋秀彰先生と、同じく企画広報部で高3学年主任を務める吉永昌弘先生に、今回はお話を伺いました。



企画広報部長 高橋 秀彰先生(左)と
企画広報部 吉永 昌弘先生(右)

DATA 1

暁星中学校・高等学校

- 沿革 1888(明治21)年 青少年の教育のために、5名の修道士(マリア会員)が来日。京橋区築地明石町に小規模の学校を設立。麹町区元園町に移転、暁星学校と命名。私立暁星学校の設立認可。
- 1899(明治32)年 私立暁星中学校の設立認可、生徒数140名。
- 1902(明治35)年 制服着用規定の制定。
- 1945(昭和20)年 空襲により中学校校舎・本館など全焼。
- 1947(昭和22)年 新学制による私立暁星中学校の設立認可。
- 1988(昭和63)年 創立100周年記念祝賀式典を挙行。
- 1989(平成元)年 創立100周年の新築工事(中・高校舎、事務棟)竣工。
- 2018(平成30)年 新講堂体育館使用開始。
- 2020(令和2)年 中学入試を、①2/2(4科)、②2/3PM(2科)の2回で実施。

校長 飯田 雅章

所在地 〒102-8133 東京都千代田区富士見1-2-5
TEL: 03-3262-3291
<https://www.gyosei-h.ed.jp/>

交通 東京メトロ東西線・半蔵門線、都営地下鉄新宿線「九段下駅」徒歩5分、JR中央線、東京メトロ東西線・南北線・有楽町線、都営地下鉄大江戸線「飯田橋駅」徒歩10～12分。

30年以上続けられてきた2月3日入試を 来春2020年入試では2回に増やし、 2/2〈4科〉と2/3PM〈2科〉で実施

東京の中心部、千代田区富士見のキャンパスで、130年近くにわたり山の手男子進学校として根強いファンを集めてきた暁星中学校・高等学校。なかには祖父の代から親子3代が暁星出身という家庭も多いと聞きます。

都内で唯一のカトリック系男子中高一貫校で、伝統ある制服や多くの著名人を輩出させてきた名門校としての歴史もあいまって、いまなお独自の存在感を保っています。

しかし、そうしたカトリック学校や男子校としての魅力を知る家庭が少なくなったためか、あるいは共学校志向の高まりの影響か、これほどの歴史と伝統を持つ暁星中高でさえも、一時期と比べると、やや志願者や実受験者の数が少なくなってきたといえます。そうした点に少なからず危機感を抱いていた同校では、ついに来春2020年入試では、2月3日から2日への入試日の移動と複数回入試の実施、そのうち第2回一般入試では、「2科目入試」の導入、帰国生（別枠）入試の新設に踏み切ることを先に公表し、来春入試に向けての注目校となっています。

「これまで本校は30年以上も変わらずに2月3日入試を続けてきましたが、この数年は、中学入試のあり方も再検討を重ねてきていました。変わらず“暁星ファン”として本校への入学を希望してくれるご家庭の受験生を大切にしつつも、間口を広げることで、新しい受験生との出会いの機会を広げ、暁星という学校を広く知ってもらうために、来春2020年の入試改革に踏み切ることになりました」と、企画広報部長の高橋秀彰先生。

確かに、以前から2月1日入試の麻布中や駒場東邦中との併願受験生が多く、私立中入試日の前倒し傾向が進むなかで、2月3日入試であることのメリットはあまりないのかもしれませんが。

「ただ、もともと思考力を問う傾向の出題で、記述問題も多くありましたので、そうした対策の学習を積んできた受験生が受けにくくならないよう、従来の4科目入試で問うてきた力や出題傾向は、2月2日に移行した入試でも変えないようにしたいと考えています。

ただ、新設する形になる2月3日の午後入試では、これまでとは違った傾向の出題を工夫したいと校内で検討しています」と高橋先生はいいます。

2月3日は、都内の国立大学附属中学校と、東京・



日常の宗教行事は決して多くはないが、いま日本で最初のカトリック系男子校としての伝統を受け継ぎ、そうして自己を見つめる機会を大切にしている。

神奈川の公立中高一貫校が、同日に一齐に入試や適性検査を行う統一日でもあります。この日の午後には2科目で入試を新設するという事は、公立中高一貫校の受験生にも、暁星中との併願の可能性を開くということなのでしょう。

「できれば、そうした公立中高一貫校の受験生にも、本校を受けていただきたいですね。そのために、入試の開始時刻は15時か、それよりも遅くする予定です」と高橋先生。

日本で最初のカトリック系男子校。 創立時から国際性豊かな学園の歴史を刻む 伝統的な“紳士教育”と“全人教育”！

日本のカトリック系男子校では、最も古い歴史と伝統を持つ暁星学園は、1817年にフランスで創立されたカトリック男子修道会『マリア会』から派遣された、アルフォンス・ヘンリック神父をはじめ5人の修道士（マリア会員）によって1888（明治21）年に現在の中央区築地に設立された小規模な学校を前身としています。当時この地は外国人居留地であったため、フランス人1名、ポルトガル人2名、日本人3名が入学し、6名の少人数で国際性豊かな学園の歴史が始まりました。

同年8月には私立暁星学校が設立認可され、2年後の1890（明治23）年には現在地に移転し、暁星小学校（旧制）が設立認可。1899（明治32）年には暁星中学校（旧制）が設立認可されています。

暁星学園の設立に関わった、アルフォンス・ヘンリック神父をはじめとするマリア会の5人の宣教師たちは共に、キリスト教的な学校教育によって日本社会に貢献をしたいと念じ、また、貢献できると信じて行動したといえます。

こうして、明治維新後に急速に近代化に向かおうと

する日本の教育の一角を担うキリスト教系の学校として誕生した暁星学園は、その後1世紀以上にわたって、この建学の精神（＝キリスト教の理念に基づく教育）によって社会に貢献し続けてきました。

日本の各地で歴史と伝統を築いてきた多くのカトリック学校のなかでも、この暁星学園が、日本で初めて設立されたカトリック系男子校として、いまなお特別な存在感を示しているのは、当時の日本の教育の近代化の期待を背負ってきた学校でもあるからかもしれません。

1919年（大正8年）には卒業生にフランスのバカロレアと同等の資格が与えられることになったという歴史からも、暁星学園に寄せられた期待と評価を感じ取ることができます。

そしてこの2019年には、学園の創立から131年を迎え、これまでに約1万4,000名の卒業生が巣立っています。開校当初から「外交官の養成機関」といわれるほど、国際人として海外で活躍する優れた人材・異才を送り出していて、なかには、アメリカ大使、国連大使など日本の外交分野や経済界、産業界で活躍しているOBのほか、歌舞伎や芸能界などで活躍されているOB（最近では香川照之さんが有名）もあり、様々な人材を各方面に輩出していることも特徴のひとつです。サッカー日本代表として活躍したJリーガーの前田遼一選手も暁星中高の卒業生です。

1923（大正12）年の関東大震災では甚大な被害を受け、1945（昭和20）年の東京大空襲では校舎が全焼する被害を受けましたが、その都度、ローマ教皇庁や経営母体であるマリア会、日本の政財界からの多くの支援により、校舎が再建されたといえます。

創立の当初からフランス語を必修としてきた伝統があり、現在も、フランス語を必修としているのも特徴のひとつです。卒業式には、フランス大使館員なども来賓として訪れます。「七つボタンに金の襟章」の黒の詰襟は、100年以上前に考案された、フランス軍の軍



「七つボタンに金の襟章」の黒の詰襟制服は、フランスの軍服をモデルにした暁星の象徴で、いまも多くの受験生の憧れ！

服をモデルとした気品あるデザインで、いまも暁星学園の象徴として広く知られています。

「カトリック校というと、やや堅苦しいとか、規則が厳しいとか、キリスト教の信者がほとんどだとか、先入観で誤解されることもあるようですが、実際には本校の学校生活で、強い宗教色を感じる場面はそれほど多くありません。私自身はプロテスタント系の男子校の出身なのですが、むしろプロテスタント校の方が、毎日の礼拝があったり、日曜教会への出席が奨励されたり、日頃の行動規範は厳しいですよ。もちろん本校でも、毎学年「宗教」の授業が週に1時間あるほか、年に2回程度の入学・卒業ミサや学年ミサ、宗教講話などがありますが、実際の宗教行事はその程度のもんです。もともとキリスト教信者のご家庭の生徒もいますが、それもほんのわずかです」と高橋秀彰先生はいます。

暁星学園の建学の精神は、「キリスト教の愛の理念に基づく教育によって、人格の完成を目指すとともに社会の福祉に貢献する人間を育成することにあります。イエス・キリストは、神と人を愛する生き方が人間にふさわしい自己実現の道であると教えました。本学園の創立者アルフォンス・ヘンリック神父は、このイエス・キリストの教えを暁星学園の教育の土台としました」と、同校の『学校案内』の冒頭にも謳われています。

あくまでもそうした考えを土台にしたうえで、同校の「基本方針」に示されている「全人教育」、「個性尊重」、「宗教教育」、「人格教育」、「正義と平和の教育」、「家庭的な校風」という、人として大切にすべき規範と行動を当たり前身に付ける、いわば“紳士教育”、“市民教育”が行われているのです。

「深い教養」「高い倫理観」「広い視野」。 それらを身に着けるために「宗教教育」 「多言語教育」を重視

それでは、先の建学の理念に基づき、現在まで受け継がれてきた暁星中学・高等学校の「教育目標」は、どのようなものなのでしょうか。

端的にまとめると、それは、①「深い教養を身に着けさせる」こと、②「高い倫理観を身に着けさせる」こと、③「広い視野を持った指導者を育成すること」と表現することができます。そして、そのために具体的には、「宗教」と「多言語教育」が、教育の土台になっているといえます。

「本校では『書く』ことを重視する教育が特徴のひとつです。たとえば国語では、長期休暇の課題として作文コンクールへの応募を課しています。英語では、フ

ランス語を第一外国語として履修する『ステラ・コース』履修者を除く、高校1～3年生に、ネイティブによるエッセイライティングの指導があります。書くことによって思考力が向上し、ふだんから『自分の語るべき言葉』が強く認識され、その結果プレゼンテーション能力も向上するという効果が期待できるからです。そしてこうした経験は、記述式問題の増加が予想される2020年度からの大学入試改革にも有効と考えています」と、高橋先生と同じく企画広報部で国語科、高3学年主任でもある吉永昌弘先生。

「暁星の中学入試に記述が多いのは、『書くこと』に対するアレルギーをなくすためでもあります」と高橋先生も言います。

「そうした意味も含めて、来春2020年入試でも、2月2日に移る一般第1回入試の国語では、物語文で心情や体験を問うといった、これまでの本校らしい出題傾向を踏襲しながら、新設される2月3日午後の一般第2回入試では、説明文の基本的な読解力、さらには『自分の意見』を伝える表現力なども問いたいと考えています。これはあくまで現時点での個人的な考えですが…」と吉永先生。

冒頭で紹介した来春2020年入試での改革によって、受験生の動向も多少変わってくるかもしれませんが、それでも、「記述（＝書くこと）重視」という暁星の伝統的な出題スタイルは、依然として踏襲されることになるのでしょうか。その一方で、新設される2月3日午後の一般第2回入試では、説明文の出題を通じて基本的、総合的な国語力を見るという方向性も示されました。他の私立中学校や公立中高一貫校との併願作戦も立てやすくなるかもしれません。

今春の「医学部合格率ランキング」では全国第1位に。 「英語4技能」の力を伸ばす工夫も！

暁星学園は創立から100年以上にわたり、各界で活躍する多彩な卒業生を輩出してきたという伝統を持ちますが、同校ではどのようなキャリア教育を行っているのでしょうか。

「高2の『宗教』の授業の時間には、様々な職業の卒業生による講演や授業（暁星版「ようこそ先輩」）を行っています。また卒業生の勤める企業や病院での職業体験も実施しています。医師を志す生徒が多いので、病院での体験はとくに好評でした。生徒たちにとって、良い刺激になったようです」と吉永先生。

ちなみに暁星は、インターエデュ調べによる、今春2019年度の大学合格実績における「医学部医学科合



クラブ活動が盛んなのも暁星の特色。中高とも強豪のサッカー部は、限られたスペースを上手に活用して練習を重ねている！

格者高校別ランキング」で、現役合格率「全国第1位」になったといます。もともと医学部や理系進学希望者が多かった傾向があり、男子校としては小規模であることから合格者数で見ると目立ちませんが、「合格率」が高いことは注目すべき特徴でしょう。

「東大や医学部を受験することを特に勧めることはしていませんが、『他者への奉仕』、『社会への貢献』を最終目標にする進路指導をしていることから、そうした進路や職業を選ぶ生徒が多くなるのかもしれませんが。もともと国公立大や医学部、私立では早慶の志望者が大半なので、そうした進路希望を後押しできるように、高校生には放課後の課外講習を多数設定するなどして、サポート体制を整えています。また、中1から独自の実力テストを年3回実施（中1は2回）して、外部模試も併用しているため、個々の生徒に対してきめ細やかな学習指導が可能になっています」と吉永先生も言います。

「大学入試が変わる」予定の2020年度入試が1年と数か月後に迫り、すでに現在の高校2年生は、その新たな大学入試の最初の当事者にあたる学年です。そうした「大学入試の変化」への対応は、どのように考えられているのでしょうか。

「これは、本校が課題としているグローバル教育とも関連しますが、新しい大学入試制度で最も大きく変わるのが英語だと考えられますので、英語では2020年度の入試改革を見据え、中2から『GTEC』を導入し、高1では『GTEC』のスピーキングテストを実施し、高1の希望者には、『オンライン英会話』も実施しています。

また2018年度は、『GTEC』の検定日受験も実施して、高1、高2ではスピーキングテストも実施し始めました。

『オンライン英会話』は、高1は希望者対象ですが、高2では今年度から授業に組み入れる形を取っています」と高橋先生。

「さらに、2018年度からは、英語の教材を『Progress in English』から『New Treasure』に変更し、中1・中2の英語でグレード別授業を開始しています。ただし、進度とテストは共通にしています。また、高1秋の校外学習では、日本の来ている留学生と一緒に、1グループにつき留学生1名をアテンドする形で、大学訪問や観光をしています。まだまだ十分とは言えないかもしれませんが、男子生徒が、自然な形で英語を使い、外国人ともコミュニケーションをとる機会を、今後も工夫していきたいと考えています」と、英語を担当する高橋先生は言います。

もともと「多言語教育」を教育の土台にしている暁星中高では、フランス語を中1から中3まで必修(高1・高2では自由選択)にしていることも、他の男子校には見られない特色のひとつです。

「英語は週6時間、フランス語は週2時間の授業となります。第一外国語をフランス語にした場合には、フランス語が週6時間、英語が週2時間という形になります」と吉永先生。

かつては東大をはじめとした国公立大学の入試に「フランス語選択」でチャレンジして強みを発揮する生徒もいたと聞いたことがあります。多くの暁星OBが、これまでもグローバルな活躍をしてきた背景には、こうして身につけたフランス語の素養も一役買っていたに違いありません。

一人ひとりの可能性の開花を信じ、自立を促しながら生徒を見守ることで他者と社会に奉仕・貢献できる人間に！

同校の『学校案内』の冒頭にある校長の飯田雅章先生の挨拶文のなかには、『「グローバル」と言えば、その歴史という点で暁星学園の右に出る学校はないでしょう。本校は創立以来、キリストの愛の理念に基づく人格形成と、仏英2ヶ国語教育による多言語・多文化教育を実践し、国内外を問わず広く社会に貢献する人材を輩出し続けてきました。小手先の技術だけでなく真の教養を身につけ、他者への奉仕という人生の目標を常に見据えることで、物事の本質を見極め、自分のなすべきことを判断する力を養うことが、本校の教育目標です」と明言されています。

カトリック学校では、もともと「真理を知るために」真摯に学問をし、「他者に奉仕 (Men for Other's)」

フランス語

	フランス語を第一外国語として履修	フランス語を第二外国語として履修
中1	<ul style="list-style-type: none"> 発音、特徴などに慣れ、正しい発音し、書くことができるようになることを目指します。 基本的な文法、動詞の活用を習得します。 	必修 週2時間 <ul style="list-style-type: none"> フランス語の発音、基本的な文法の理解を目指します。 フランス語に親しみを持てるようにします。
中2	<ul style="list-style-type: none"> 正しい発音で読み、書き、話すことができるようになることを目指します。 簡単な文章を訳せるよう、語彙を増やします。 	
中3	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な文法事項を完全に習得することを旨とし、中級フランス語へ移行します。 簡単な日常会話ができるよう目指します。 	
高1	<ul style="list-style-type: none"> 中級フランス語の完成を目指します。 簡単な文を聞き取り、書けるようにします。 簡単な和文仏訳ができるようになります。 	選択 週2時間 <ul style="list-style-type: none"> 簡単なフランス語の文章を読み、フランスの文化・教養を広く身につけます。 簡単なフランス語の新聞などを読み、フランスへの関心をさらに高めます。
高2	<ul style="list-style-type: none"> 上級フランス語へ移行します。 応用的な文法事項の習得、語彙力の強化を図ります。 	
高3	<ul style="list-style-type: none"> フランスの小説、新聞、雑誌などを読み、自分の考えをフランス語で表現できるようにします。 	

中高ともフランス語を履修できるのは暁星ならではの伝統(中学では必修)。フランス語を第一外国語として履修することもできる。

するために個々に与えられたタラント(才能)を努力して磨くこと、そのために各自が選んだ進路目標をかなえるために「大学受験にも正面から取り組む」ことが奨励されてきました。

「暁星学園では、約130年という長きにわたって、こうした教育のもとで、多くの生徒が、自らの個性を発揮し、教員や友人、先輩後輩との交流を深めることで、新たな可能性を発見して本校を巣立っていきました」という校長の飯田先生は、「生徒たちが花ならば、私たち教員は庭師です」と語っています。

「授業や部活動を通して、自立を促しながら生徒たちを見守り、根底に流れる家庭的雰囲気を大切に、生徒一人ひとりの可能性の開花を促したいと思います」と飯田先生。

この「生徒一人ひとりの可能性を信じて」、焦ることなく生徒を見守り育て、自立を促す教育姿勢と生徒との距離感こそが、カトリック学校の魅力であり、そのなかでも男子校としては最も長い歴史を持つ、この暁星学園が、130年近くにわたって培ってきた「伝統の力」と独自の校風に他ならないのでしょう。その雰囲気は、同校のキャンパスに足を踏み入れ、在校生の様子を見ることができると、きっと体感できるはずです。

やはり同校の『学校案内』に掲載されている、5人の暁星OB大学生が語る座談会のなかで、一人のOBが語っていた「将来、息子が生まれたら暁星に通わせたい。そう思っている卒業生は多いと思うよ」という言葉が、暁星の魅力を最も象徴しているように思えます。

今後の大学入試や社会の変化に対応した新たな教育の取り組みを次々に開始。ICT活用は『BYOD方式』でスタート！

こうして、約130年にわたって、変わらぬ教育理念を受け継いできた暁星ですが、いま、大きな転換期を

迎えているといわれる「大学入試の変化」とその先の「社会の変化」のもとで、その教育にも新たな要素やプログラムが導入されています。

「校門に入って左手に、2018年11月に新講堂・体育館棟が竣工しました。その奥にも新施設を現在工事中で、これが完成すると、さらに教育環境が整い、暁星の新たな教育リソースになります」と高橋先生。千代田区という東京の中心地ともいえる都心にありながら、キャンパスに入ってみると、思った以上に校地も広く、恵まれた環境であることに驚かされます。

「2015年からは、劇団員によるコミュニケーション授業を毎年複数学年で実施しています。『ドラマエデュケーション』の要素も含んでいるものです。新たな教育の課題ともいえるアクティブラーニングや移動式視聴覚教材による授業など、ICT活用も推進していく予定です。

また、中学では『人間ドキュメント』、高校では『企業インターン』と銘打った総合学習の授業も開始しています。高1の家庭科では2回にわたって、近くの市ヶ谷にある料理学校で調理を体験し、生活的自立を促す機会も設けています。この家庭科の授業には生徒も楽しんで取り組んでいるようです」と高橋先生。

この先の「変わる大学入試」では、eポートフォリオの必要性も伝えられていますが、その取り組みもすでに始められています。

「2018年度からは、いわゆる『BYOD (Bring Your Own Device (ブリング・ユア・OWN・デバイス) = 自分の端末は自分で持ってくる) 方式』で、クラッシーやスタディアサプリなどによる『eポートフォリオ』のシステムを導入し、活用を始めています。もともと本校の生徒は書くことにあまり抵抗がないので、かえって生徒の方が積極的に使っている様子です。これは今後の大学入試でも本校の強みになると思います」と吉永先生は言います。

「まだまだICT活用では、先進的な取り組みをしている他の学校に比べると遅れています」と高橋先生は謙遜しますが、この『BYOD方式』での活用に踏み切ったことも、「自主性を尊重する」暁星らしい発想ということができるでしょう。生徒の自由な発想による、今後の展開や成果が楽しみです。

また、暁星中高の6年間では、多くの行事やクラブ活動に、男子生徒がのびのびと取り組めることも大きな魅力です。

男子ばかり約170名の生徒が一緒に、入学直後の「中1オリエンテーション」に始まり、ミサやスポーツ大会で友人との交流・相互理解を図り、合わせて自己内省や人間性を高める活動も行う「中1菅平合宿」、広島・

◎体育系

クラブ名	活動場所	活動日
化学	化学実験室	水金
生物	生物実験室	基本週2日
音楽	音楽室	火木金
鉄道研究	特別校舎	火水土
仏語	教室	火木金
将棋	特別校舎	火水土
物理	物理実験室	水金土
室内楽研究	音楽室	水土
競技かるた	特別校舎	月火木土
コンピュータ	部室	火金
演劇	教室	火木金土
数学研究	教室	金
チェス	特別校舎	火金
写真	校内	月
合唱	教室	月木
放送	放送室	火
地学	地学室	火水土
クイズ研究	教室	金

◎学芸系

クラブ名	活動場所	活動日
軟式野球	校庭 外部球場	月水土日
バスケットボール	体育館	火木土日
サッカー	校庭 外部球場	月を除く毎日
陸上	校庭 学校周辺 外部競技場	月水金土日
バレーボール	小学校 体育館	中：月水金土日 高：火木金土日
卓球	体育館 特別校舎卓球室	月水金土
ソフトテニス	校庭 外部コート	火木土日
山岳	校内	火木金
剣道	剣道場	月水土
水泳	プール 外部室内プール	火水金土
テニス	校庭 外部球場	月水金土日

2019年3月現在の実施例

体育(運動部)系、学芸(文化部)系とも活発に活動しているのが暁星の特色であり、男子校らしさ。サッカー、かるた、水泳など全国的に活躍する部も!

関西方面に4泊5日で行われ、広島での平和学習、京都・奈良での座禅などの体験学習をする「中3研修旅行」などで、ともに宿泊して数日を過ごす体験は、生徒の成長を促し、楽しい思い出や深い人間関係を築く、貴重な機会になっています。

クラブ活動への積極的な参加も、男子校らしい暁星の特色のひとつといえるでしょう。

「中1時点での約98%の入部率は、それを必須としていない私立中のなかではかなり高い方だと言えるでしょう。

運動部では全国大会でも活躍する中学サッカー一部の人気が高いのですが、高校かるた部も全国大会優勝(9連覇を含む11回優勝)の常連で、漫画(アニメ)『ちはやふる』の取材モデル校にもなっていました。中学水泳部も全国大会に出場しています。

文化部も、物理部・化学部・生物部・地学部の4つの理科系クラブの活動が盛んで、音楽部・室内楽研究部・合唱部の3つの音楽関係クラブの活動もユニークです。鉄道研究部・チェス部など、特色ある文化部の活動も充実しています。

このほかにも、がんばっている運動部・文化部がありますから、小学生と保護者には、ぜひ文化祭などに来て、その雰囲気を感じてほしいですね。きっと、どんなタイプのお子さんにも、楽しめるクラブがあるとと思います」と高橋先生。

男子校ならではの、女子の目を気にせず、思い切り「オタク」や「スポーツ少年」になれるクラブ活動の魅力は、きっと男子小学生の受験勉強の励みにもなるはずですよ。